

「あだ名」にまつわる話し

夏目漱石『坊っちゃん』の登場人物の「あだ名」

「あだ名」の出でくる小説で私が真っ先に思い浮かべるのは、夏目漱石の『坊っちゃん』です。主人公の坊っちゃんは、東京の物理学校を卒業後、母校の校長の誘いに「行きましょよと即席に返事をした」ことから四国の旧制中学校に数学の教師として赴任することになります。学校に着いた坊っちゃんは同じ学校で働く教師の紹介を受け、知り合った教師達にあだ名を付けていきます。校長は「狸」、教頭は「赤シャツ」、英語の先生は「うらなり」、画学の教師は「野だいこ」、坊っちゃんと同じく数学を教える教師は「山嵐」といった調子です。坊っちゃんは生徒達から「天麩羅先生」とあだ名を付けられます。その後、坊っちゃんとのあだ名を付けた教師達との人間関係が描かれていきます。あることから教頭の「赤シャツ」と「野だいこ」を殴ってしまった坊っちゃんは1月ほどで教師の職を辞することとなりますが、坊っちゃんの決して嘘をいわない、他人の嘘も許さないまっすぐな生き方に感銘を覚えました。登場人物のあだ名の由来などを下に示します。

- 「狸」：校長。事なかれ主義の優柔不断な人物。
- 「赤シャツ」：教頭。坊っちゃんの学校でただ一人の帝大卒の文学士。陰湿な性格で、坊っちゃんや山嵐から毛嫌いされる。通年、ネルの赤いシャツを着用する。琥珀製のパイプを絹のハンカチで磨く。
- 「うらなり」：英語教師。お人よしで消極的な性格。坊っちゃんは青白い顔でありながらふくらんでいる彼の顔を見て、子供の頃に同じように青くふくらんだ顔の人物について下女の清が、「あれはうらなりのとうなすばかり食べているからあんなった」といっていたのを思い出し、「うらなり」と名付けた。
- 「野だいこ」：画学教師。東京出身。赤シャツの腰巾着。江戸っ子で、芸人ふうに「…でげす」という。気に入らないものに陰口を叩いたり、上司におべっかを使うため、坊っちゃんからは赤シャツ以上によく思われていない。
- 「山嵐」：数学の主任教師。会津出身。面構えは坊っちゃん曰く「(比)叡山の悪僧」。正義感の強い性格で生徒に人望がある。当初、山嵐だけが坊っちゃんを支持してくれ、坊っちゃんと山嵐とは強い友情で結ばれる。
- 「天麩羅先生」：坊っちゃんが街の中で天麩羅そばを4杯食べているところを生徒達に見られた。

中学・高校時代の先生方の「あだ名」

坊っちゃんが「天麩羅先生」というあだ名を生徒から付けられたという話しをしましたが、校長の中学・高校時代にも多くの先生方を親愛の情を込めて陰で「あだ名」で呼んでいました。おそらく、生徒諸君も陰では先生方を「あだ名」で呼んでいるので、本人が何かの折に聞き及んだ時に、嫌な気持ちにならないような、本人もなるほどと納得できるような愛着のある「あだ名」を付けてもらいたいと思います。中学・高校時代の先生方のあだ名の由来などを下に示します。

- ＜中学時代＞
 - 「赤影」：中学3年のクラス担任。英語の教師。さわやかなイケメンで、当時流行したテレビドラマ『仮面の忍者赤影』の主人公赤影と瓜二つ。
 - 「ガバチョ」：保健体育の教師。当時流行した井上ひさし原作のNHKの人形劇『ひょっこりひょうたん島』の登場人物ドン・ガバチョの風貌となんとなく似ていた。
- ＜高校時代＞
 - 「コンパニオン」：世界史の教師。世界史の授業で使用した資料集『コンパニオン』があだ名の由来。
 - 「すぶた」：国語の教師。あだ名の由来は分からないが、先輩方から引き継いだ。中華料理の「酢豚」という印象がぴったりだった。
 - 「ゼロ戦」：政治経済の教師。授業中に時々天井の方を見る癖があった。戦闘機乗りで、基地で上空から現れる敵機を見張っていたというわさが流れていた。
 - 「あわぐち」：日本史の教師。□角に泡を溜めながら熱い授業を展開。巨人で活躍した淡口にかけたあだ名。

大学時代の友達「あだ名」

今でも大学時代の友達に会うと、大学時代の「あだ名」でお互いを呼び合います。「タマラ」、「めぐすり」、「歌吉」、「愚蛇」、「D-ちゃん」、「ゴンちゃん」、「バイチくん」、「得さん」などという友達があります。私は「タヌキ」と呼ばれています。私もそうですが、それぞれに自分のあだ名を気に入っています。あだ名でお互いを呼び合える仲というのは、お互いを信頼関係で結び付けている証拠であり、誰一人嫌がる人はません。生徒諸君も将来あだ名で呼び合える何でも話せるような親友を作ってください。人生が豊かになります。大学時代の校長の「タヌキ」というあだ名の由来などを下に示します。

「タヌキ」：黒鉄ヒロシの漫画『赤兵衛』に登場する「タヌキ」の風貌と似ているということから。
 ※『赤兵衛』に登場する「タヌキ」のぬいぐるみの写真を下に示しました。校長の風貌とどことなく似ているでしょうか？



校長の「あだ名」の変遷

校長の「あだ名」の変遷の歴史を書いてみます。まず、幼稚園の頃は、芳樹という名前から「よっちゃん」とか「よっちぎちゃん」というあだ名で呼ばれていました。小学・中学時代には、肥満の傾向が顕著になりましたので、御多分に漏れず「でぶよし」とか「ぶたよし」などと呼ばれていましたが、「大橋でぶよし」とか「大橋ぶたよし」などと自ら名乗り、特に落ち込むようなことはありませんでした。高校時代には、似ている人物を見つけ似ている順にA、B、C…のアルファベットを付けて呼ぶという、変わったあだ名がはやりました。私は、「船山A」で「美野輪B」でした。船山君は、「大橋A」で「美野輪C」でした。美野輪君は、「大橋B」で「船山C」でした。大学時代は、先ほど話したように「タヌキ」と呼ばれました。教員として足尾高に赴任した直後に、機械科3年の生徒達から「ギョッ」というあだ名を付けられました。「ギョッ」というのはどうやら「牛」のここのようでした。また、非常に暑がりな汗を流しながらバスタオルを首からぶら下げていたことが多かったので、「ジャン鶴」（プロレスラーの「ジャンボ鶴田」のこと）と呼ばれるようになりました。このように、歳を取るにしたがって様々なあだ名で呼ばれることになりましたが、私が一番気に入っているのは、やはり大学時代の「タヌキ」というあだ名です。黒鉄ヒロシの『赤兵衛』という漫画が好きだったことはもちろんですが、「タヌキ」という言葉の響きが好きなことと、「タヌキ」は「他抜き」、つまり「他を抜く」ということにつながり、大変縁起のいい意味をもつ言葉だということです。生徒諸君が陰で校長をあだ名で呼ぶ場合には、ぜひ「タヌキ」をお願いします。

校長の落款「芳タヌキ」

右に示したのは、本年度の耐久レースの参加賞として生徒諸君に配布した手拭に印刷してもらった「徹底挑戦」の題字に添えた校長手作りの落款です。芳樹の「芳」という漢字を下のようになんとなく左手で拳を握ったタヌキに見えるようにデザイン化したものです。「他を抜く」の意味を込めて「芳タヌキ」と命名しました。

